第６課　アダムとイエス

【暗唱聖句】

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」ローマ5:1、2

【今週のテーマ】

アダムという1人の人の堕落によって有罪宣告、疎外、死がすべての人に入り込んできましたが、イエスという1人の人の勝利によって、罪が取り消され、永遠の命へと移される道が開かれたことを学びます。

【日曜日・信仰によって義とされる】

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」ローマ5:1、2

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから」という言葉は完了形で書かれてあります。信仰によって義とみなされるという出来事はすでに起こったことであり、これからつかみ取っていくものではないということです。わたしたちはすでに「わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得て」います。罪とは神との間の平和を失った状態でした。すべてが「キリストのお陰」です。わたしたちは何の価値もないのに、ただ神様の「恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望」を持つものとなりました。これをパウロは誇りにしている（口語訳聖書では喜んでいる）と言っています。

5:3 そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、5:4 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5:5 希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

パウロにとって「神の栄光にあずかる希望」は誇りでした。その希望は、苦難の中にさえあると続けます。なぜなら、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むからです。それゆえ、パウロは苦難さえも誇りとするといっているわけです。

原語の解説では、苦難から生まれる「忍耐・ヒュポモネー」は揺るぎない我慢強さを意味します。苦難によってわたしたちは揺らぐことのない我慢強さを得ることができるのだと、パウロは苦難に意味があることを教えています。「練達・ドキメー」は立証された性質を意味します。忍耐を続けることによって品性が確立されていくということです。苦難を忍耐し、品性が練達されていく中で、わたしたちのキリストに対する希望はいよいよ強くなっていきます。希望が奪われるような状況だからこそ希望が生まれ、揺るぎない信仰と品性が希望をさらに確かなものとしていくのです。そして、このような誇るべき希望も、すべては主の恵みによって招き入れられた信仰によって生まれたのです。

【月曜日・まだ罪人であったとき】

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」ローマ5:6～8。

ここでパウロが言いたいことのポイントは、イエス・キリストはわたしたちが良い人間だから十字架で救おうとされたのではなかったということです。むしろ、わたしたちが罪人であったときに、つまり神様から遠く離れて生きていたときに十字架にかかって死んでくださいました。これによって神様がどれほどわたしたちを愛してくださっているのかがわかるようになったのです。

「それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」ローマ5:9

わたしたちが義とされると言うことに関して、キリストが流された「血」が強調されています。血は命の象徴です。神の御子の命が捧げられたのです。それがどれほど尊いことであるかをわたしたちに訴えているわけです。そして、その神の御子の命である血によってわたしたちは義とされたのです。ならば、なぜ神の怒りから救われないことがあるだろうかと展開しています。なぜなら、御子の命が捧げられたのは主がわたしたちを愛しておられたからです。これほど大きな愛を受けているのに、その愛の対処である神の子たちに怒りが向けられることがあるだろうかということです。また、同時にこの世を愛される神様は、この世で行われる悪に対してはその愛のゆえに、怒らずにはおれないのです。

「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです」ローマ5:10、11

さらにパウロは「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです」と続けます。すでに信じる者は御子の死によって神様と和解させていただいています。それはすでに完了したことです。それなのにいまもなお、神様の怒りが自分たちに向けられているのではないかと恐れる必要があるでしょうか。

【火曜日・罪による死】

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」ローマ5:12

なぜ、人間は死を恐れるのでしょう。それは元々永遠に生きるようにと造られた人間の基本的な性質と合わないからです。本来、死などもたらされるべきではなかったのです。しかし、すべての人が罪を犯しました。1人の人（アダム）から始まった罪はすべての人に及び、その罪によってすべての人に死が及びました。そこに議論の余地はありません。パウロは再びにそこにわたしたちの目を向けさせます。それは罪の自覚なしに、救い主イエス・キリストの本当の必要がわからないからです。それは言葉をかえると、神様の愛を知るために、罪の自覚が必要だということです。

【水曜日・アダムからモーセまで】

「律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです」ローマ5:13、14

モーセに十戒が授けられる前にも当然、罪がありました。当然、その結果を身に受けなければなりません。しかし、律法がなければ、罪は罪と認められないとパウロは言います。ところが、罪と認められないのにも関わらず、さらにアダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ死が入りこんできました。そう考えると、アダム1人によってすべての人の上に死がもたらされたということがわかります。それはアダムが「来るべき方を前もって表す者だった」からだとパウロは言います。つまり、イエス・キリストを人類に指し示すために、すべての人に死が入りこんだのだと言うわけです。さらにパウロは続けます。

「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです」5:20、21

律法が与えられることによって、罪がはっきりわかるようになり、その結果、罪がまし加わることになりました。一見、それは良くないことのように思えますが、しかし、ここにも神様のご計画があったのです。それは神様の恵みが一層満ち溢れるためです。罪が死によって支配したように、恵みも義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くことになったのです。

【木曜日・第二のアダム・イエス】

「そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです」ローマ5:18、19

|  |  |
| --- | --- |
| アダム | キリスト |
| 死 | 命 |
| 不従順 | 従順 |
| 有罪 | 無罪 |
| 罪 | 義 |

パウロは、賜物という言葉を繰り返し使っています。義認は獲得するものではなく、賜物として与えられるものであるということです。信仰によって、その賜物を受け取ることができるのです。